森井先生のこと（その５）

真﨑隆治

学長を務められた８年間に、森井先生はキリスト教主義に基づく明治学院大学の伝統を妥協することなく守りとおし、明治学院の社会的な評価を高められた。学長になられた直後は、学長室に研究書などおいて、暇を見ては読んでおられたが、いつか研究書は姿を消し、仕事一辺倒の日々になった。学長を退かれてからお聞きしたことだが、「学部長までは忙しいといっても、どこかに〈私〉というものがありましたけれど、学長にはそれがまるでないんですよ」と言われた。私も学生部長や教養教育センター長という、いわゆる激職といわれるものを経験したが、やはりどこかに個人としての余裕の時間があった。だいたい「最後の責任は学長にとってもらえる」という甘えの余地があった。しかし学長はちがう。仕事で４人の学長と間近に接する機会があったが、学長職にはほとんど私的な時間のないことが分かった。森井先生の学長室から研究書が姿を消したのも当然である。それだけに、学長職から離れたとたんに、「カルヴァンの手紙を読んでるんです」と嬉しそうに言われた先生の顔が忘れられない。学長の仕事から解放されたら、私ならすべてを放り出して酒飲み三昧の日々に突入するであろうものを、森井先生は書物、それも、ただでも易しいとは言えないカルヴァンの、しかも大半がラテン語で書かれている膨大な書簡を読み通す仕事にとりかかられたのであるから、私などの及ぶところではない。日本ではもちろんだが、世界でもカルヴァンの全書簡を読んだ学者はそう多くはないだろう。その成果が『ジャン・カルヴァン――ある運命』（教文館）に結晶することになる。

本書についてはすでに《白金通信》に書評を書かせていただいたが、紙面の関係で触れられなかったことを一つ述べたい。それは先生の文章が冗長を排し明快闊達なことである。カルヴァンが活躍した16世紀前半から中葉にかけては、ヨーロッパの歴史のなかでもとくに複雑で激しい時代である。なにしろプロテスタントが誕生した波瀾万丈の時代である。コロンブスが地球は丸いと言い、コペルニクスのせいで地球が回転しはじめた時代である。それだけに中世から近代への曲がり角として、世の中の全体がまったく新しいものへ脱皮しようともがいているようなこの 100 年間を要領よく説明するのは至難の業である。ところが森井先生は最初の数頁でこの時代の状況や精神ばかりか、カルヴァンの思想の本質まで的確に描きだしてしまうのだ。読んでみればなんでもないようだが、それこそコロンブスの卵である。もちろん細部をともなうものではない。細部を描けば１０冊の本になろう。しかし、「それでも地球は回る」という簡潔な言葉が内容として正しく、同時にその時代に生きた人の決然たる心情を感じさせるように、先生の言葉は時代の焦点をとらえてあやまたず、歴史を学びつつ築かれた思想を明確に伝えるのである。こんなにあっさり言ってのけていいのだろうかと時には訝りながら、各章につけられている注を見て仰天し、浅学の身を思い知らされることになる。わずかな記述の背景になんと多くの研究書が下敷きにされていることだろう。

文献が多く並んでいるから立派な本だとはいわない。しかし私は先生がこれら無数の文献を自家薬籠中のものとされていることを知っている。お宅にうかがって、机の上に開かれている本を覗くと、頁の余白に所狭しとばかりに書き込みがある。たまたまその本がというのではない。書棚から適当に引き出してみた本も、お借りした本も、どれもみなびっしりと書き込みがあるのだ。記述に関する感想、疑問、意見、参照すべき他の研究書、等々。先生はこれらの学者たちとの議論に参加して、耳傾け、意見を述べ、反論したり意気投合したりしておられるのだ。だからその文は一級の学者たちとの議論を経た百戦錬磨のものとなる。先生の文章の論旨が明快であるとともに強靭であることの秘密がここにある。

本書についてもう一つ触れたい。フランス語読みでミシェル・セルヴェというスペイン人の医者のことだ。彼は血液の小循環や肺循環を発見して医学に多大な貢献をした人物であるが、彼の豊かすぎる才能と時代の枠に収まりきれない発想と、傲慢で傍若無人な性格が災いする。医学の世界でおとなしくしていればいいものを、事もあろうにキリスト教の批判を始めたのである。それも三位一体論の否定という、この時代においてはなによりも危険なテーマであり、1531 年には著作も著した。カルヴァンは 1534 年ころからセルヴェが意見を撤回するように手をつくして説得するが、セルヴェは一顧だにせず、ついにカルヴァンは彼を見限ることになる。それどころか、彼がジュネーヴに来たら、「私の権威が強力である限り、かれは生きて立ち去ることは決して許されないでしょう」と 1546 年２月の書簡に書く。セルヴェは 1553 年１月に出版した『キリスト教の再建』によりカトリック教会から異端審問所に訴えられ、４月に異端として火刑の判決を受けた。しかしセルヴェは脱出に成功し、隠れ家をもとめてナポリへ向かう途次、なにを思ったか今や彼にとってもっとも危険な土地の一つであるジュネーヴに立ち寄ったのである。彼は逮捕され、裁判を受け、10 月 27 日、生きたまま火刑に処せられた。火刑といっても、おおかたはまず絞首刑にしてから見せしめに火刑にするという苦痛を軽減する方法をとるのだが、ここではもっとも苛酷な方法がとられたのである。カルヴァンは長年にわたりセルヴェを真摯に諫め続けてきた。処刑にあたっては残酷な方法をとらないように市当局に求めた。しかし死刑には反対しなかった。カルヴァンにもそれなりの信念と改革途上での必要性とからセルヴェを赦免できない事情があった。それでも、彼が思想の名において人を殺した事実に変わりはない。

この事件はカルヴァン研究者を悩ませ続けてきた。森井先生の筆も本章ではカルヴァンの努力や背景を語りながら、もう一つ冴えがない。事件の陰惨な性質が筆に苦渋を強いるのである。しかし本章の真髄はこの先にある。セバスティアン・カステリョンというカルヴァンの仲間であった若い牧師が、彼の不寛容を咎めて『異端は迫害されるべきか』という冊子を書き、「教義に関する知識よりも清い心をもつこととか、いかに生きるかという問題のほうが大事であり、三位一体や予定説の知識がなくても救われるのだ」とカルヴァンを真っ向から論難したのである。また、霊的な罪は世俗の剣でなく霊的な剣で罰するべきだとして、「人を殺すこと、それは教義を守ることではなく、人を殺すことである」と喝破する。そして、いかなる場合にも死刑には反対であり、最終的処罰は国外追放であるとした。カルヴァンは激怒する。カルヴァンはカステリョンを愛していた。若き日のカルヴァンはセネカの『寛仁論注解』で世に出た人だからカステリョンの言うようなことは承知のうえである。だからセルヴェへの選択は喜んでなされたどころか、余人の覗い知れぬ苦渋に満ちたものであったはずだ。それあるに、愛弟子ともいうべき男がなんという言いぐさだ。カルヴァン

は裏切られた思いがしたであろう。カステリヨンは国外追放になる。議論するのがいのちがけの時代であった。

この事件はさらに大きな歴史的な問題をはらんでいる。1552 年、ジュネーヴ市はカルヴァンの『キリスト教綱要』を、「一切の批判を将来にわたって許さない、真理への無謬の手引きである」と宣言した。たしかに宣言したのはカルヴァンではない。しかし彼の承諾なしにこのような宣言が出されるわけがない。神ならぬ者の著作が無謬というのは、ローマ・カトリック教会の教皇無謬説にたいして戦ってきたカルヴァンであれば到底認められないはずのことなのに、自ら同じ穴の狢となりながらそれに気づいていない。思想的不寛容といい、自らの無謬の承認といい、晩年のカルヴァンには哀れがある。森井先生はこうした点を指摘されたうえで、「セルヴェを火刑にしたのは（・・・）一六世紀の誤りであるとともに、その時代に生きていたカルヴァンの誤りでもあり、さらにまた、屈折したかたちで問題が今にいたるまでなお尾を引いている人類の誤りでもある」のかもしれないとして、「価値の相対化について、寛容について、また人間の尊厳や人権について」、こんにちでは火焙りにこそされないまでも、自分と考えを異にする者を憎む宗教者や、自分の属する教派教団の教勢の拡大を神の栄光と混同して気付かない神学者などがいまでも稀でないことを嘆くのである。なぜ人は寛容になれないのか。なぜ思想を相対化できないのか。なぜ自らを権威として他を裁き命まで奪うのか。

カルヴァンも、平清盛も、魏の曹操も、そしておそらく宮崎県前知事も、みなそれぞれに権力を握るまでは、悪を憎み、不正を正し、世に平和をもたらそうと決意していたであろう。しかるに権力の魔はいつのまにか心の奥底にしのびこみ、かつて唾棄していたものを自らが平然と行うようにさせてしまのだ。それは永遠に変わらぬ人間の宿命なのだろうか。

昨夏、先生の甲斐大泉の別荘をお訪ねした。奥様が近頃はやりの数独という数字のパズルをしていらした。難しい問題集で、そう簡単には解けそうにもない。本を見せていただいた。なかには先生の筆跡で取り組まれた形跡がいくつかあった。そこで「数字のパズルがお好きなのですか」とお尋ねすると、「ぼくはトランプ占いのほうが好きなんです。数字のも面白いことは認めるんですよ。でも答は〈これしかない〉でしょ。占いのほうは、しめた、と思ったとたんにひでえことがおこったりして、自分の思うようにいかないところが人生みたいでおもしろいんです」

『カルヴァン』の副題は〈ある運命〉である。こうすれば必ずこうなるとは限らない人生のいたずらに翻弄されながらも、そのなかで自らをつくして生きることの大切さを森井先生はカルヴァンのなかにも見出されたにちがいない。それはまた、若き日の理想の輝きが、現実のなかで次第に色あせて、いつしか正反対の言動をとっている自分の宿命に気づいた瞬間の悲哀を「運命」という語に託しておられるのかもしれない。あるいは、人はどのような運命に見舞われようとも、そのなかで雄々しく生きようとする人の姿への感動がこめられているのかもしれない。いかに頑張ってみても及ばない運命を、悲喜交々さまざまに、あらゆるものをごたまぜにして引きずりながら人は生きていく。その総体が人生であり、その人生を演出するのが運命であり、それを良きにつけ悪しきにつけ引き受けるのが人間の宿命であるとすれば、ここでの「ある運命」とは、「ある人間」といってもよいのかもしれない。

森井先生のことを書き始めたとき、ここまで長くなるとは予想していなかった。長期にわたりおつきあいくださった皆さんはもとより、こ

のような拙い文の執筆をお許しくださった森井先生の「寛容」に、心からの感謝を捧げたい。しかし書いてみると、まだとても書き切れるものではない。森井先生の奥は深く、エピソードも尽きないようである。

さて、しめくくりのエピソード。数独に取り組まれていた奥様は、今もバッハ合唱団を主宰している恵美子さんではなく、森井先生が 50 歳を過ぎて再婚された幸子さんである。やがて二人のあいだに女の子が与えられた。もともと子煩悩の素質十分の森井先生である。直子ちゃんの誕生をどれほど喜ばれたかは想像するまでもない。まだ生まれて間もないころ、フランス文学科の研究室に現れた先生は、昼休みのこととて雑談していた教師どもにむかって、「あのね、直子がね、ラテン語で〈水ほしい〉っていったんですよ！」と言われた。一同が唖然とするなかで、先生は厳かに「〈アクア〉って」と続けられた。たしかに aqua は水である。だが、たかが赤んぼのゲップじゃないか。（終）

（まざき　たかはる
所員・教養教育センター教授）